上野 女流世界一

呉清源杯世界女子囲碁オープン戦

持ち味であるパワーを磨き、苦手なヨセの改善に取り組んで、女流世界一となった上野

11月24日から12月1日（28日は休息日）に第7回呉清源杯世界女子囲碁オープン戦が行われた。本戦1回戦から準決勝まで中国福建省福州市「五子登科宅第（黄巷郭柏蔭故居）」、決勝三番勝負は福建省福州市「呉清源囲棋会館」。決勝で日本の上野愛咲美五段が中国の唐嘉雯六段に2勝1敗で勝利し、世界一の栄冠を掴んだ。団長の謝依旻七段とともに歩んだ軌跡を見ていこう。

2度目の世界一

上野は2022年SENKOCUP以来の2度目の世界一。12月2日に日本棋院東京本院で行われた記者会見で「出発前は優勝できるとは思わなかったので不思議な気持ち。苦しい碁をものにできて勢いにのれた」と喜びを語った。

気持ちを立て直す

決勝の第1局は上野の好局となるも、第2局は対照的な内容で完敗となった。対局後に団長の謝七段と通訳の郭さんで買い物に出かけたそうだ。「機敏転換ができて、安心して対局に臨めた」と上野。

第3局の立ち上がりは上野が苦しい展開となるも「形勢を悲観していたのもあり、開き直り、思い切った手を打てたのが良かった」と感想を述べた。手応えを感じたのは**総譜3**の99手目だという。最終的に、白の大石を仕留めて勝利した。

世界一への取り組み

本戦3回戦と準決勝では『パワー』ではなく『ヨセの力』で細かい勝負を制す、今までと異なる強さを示した。「(ナショナルチームで)対局の他に、作成されたヨセや詰碁に取り組んでました。特に、小山先生（空也六段）にヨセの目数計算を教えて頂けたのが、すごく勉強になった」という。

また、金曜日の研究会では、中盤の細かい形勢から対局する『ヨセマッチ』にも取り組んでいたのも、ヨセの強化に繋がったのかもしれない。

棋道web
上野世界一
詳細記事

対局情報

持ち時間　各2時間（使い切ってから1分の秒読み5回）
規定　中国ルール（コミ7目半）

楽しく強くなる

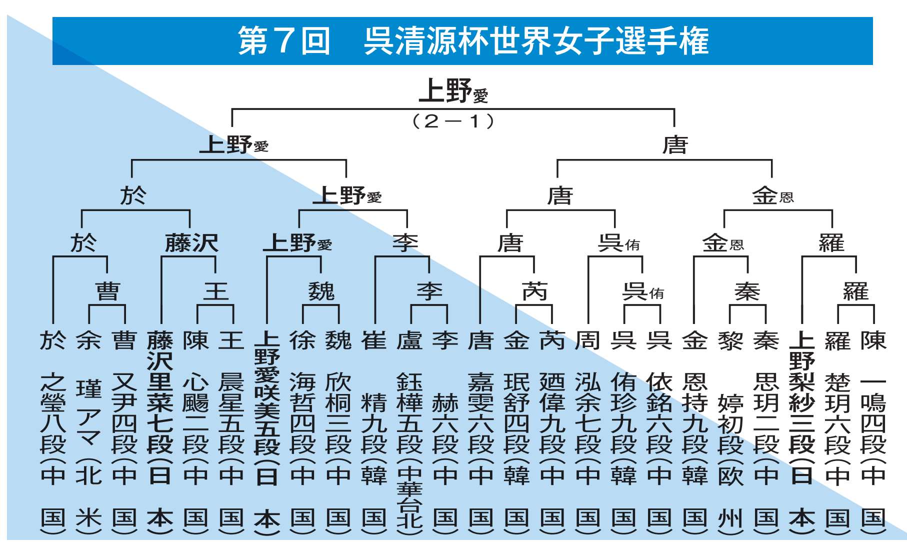
今回の世界戦を通して上野は「AI研究で棋士全体の実力差が小さくなっているので、勢いがあれば優勝は狙えると思う」と日本勢の更なる活躍に期待を込めた。

ただ、上野は攻めの棋風であり、AIと異なる進行を辿ることが度々ある。「AI通りに打てる方は強いですが、自分には合わない。『AIの意見を取り入れつつ、のびのびと打ちたい手を打つ』ことを大事にしたい」と上野流の考えを披露した。

最後に、来年への抱負について「直近ではSENKOCUPが目標。男女混合の世界戦も頑張りたいですし、国内の早碁棋戦なども頑張りたい。リーグ入りはまだ厳しいですが、目指したいなと思っています」と語った。

㊤決勝三番勝負第3局の終局直後の感想戦。攻めと守りで力を発揮した上野の好局。㊦棋士達を全力で支えた団長の謝七段と上野で記念撮影

世界に轟くハンマー



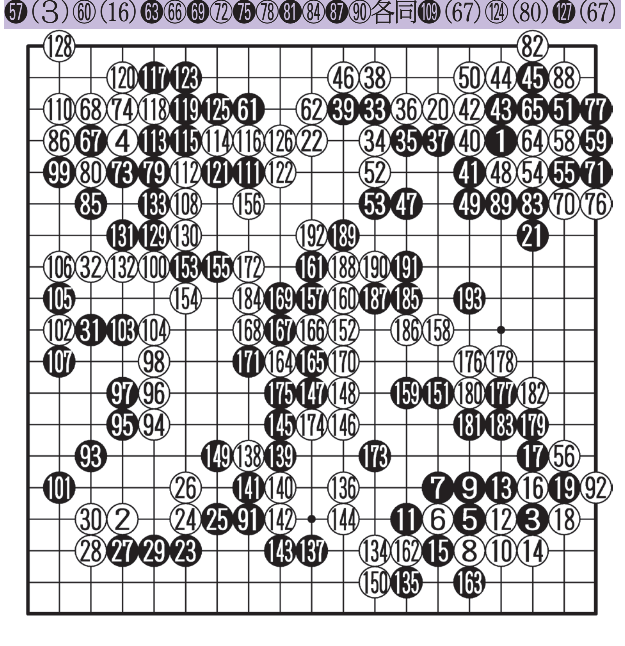
気分良い環境を

今回、初の団長を務めた謝七段は「技術以外のサポートに力を注ぎ、気分良く打ってもらえることを心掛けた」と振り返る。謝七段と郭さんは、対局開始の12時前に空いているレストランが限られる中、場所や時間を調整し、ストレスの少ない環境作りに努めた。現地の選手達は明るい雰囲気で過ごしていたという。

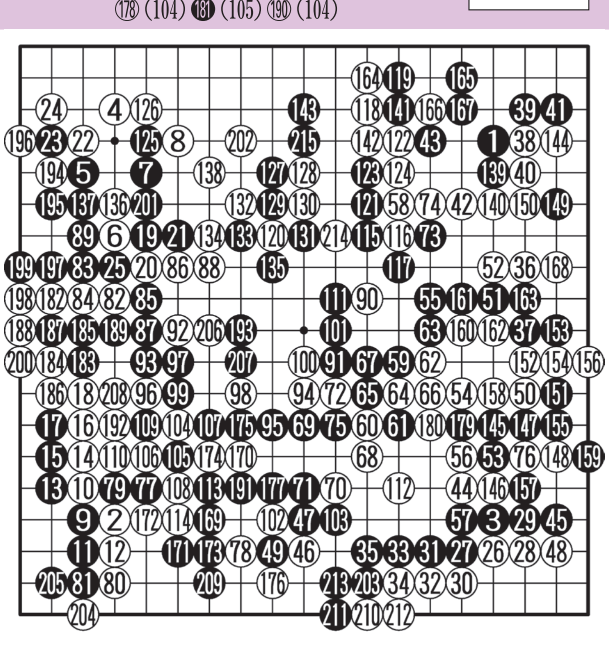
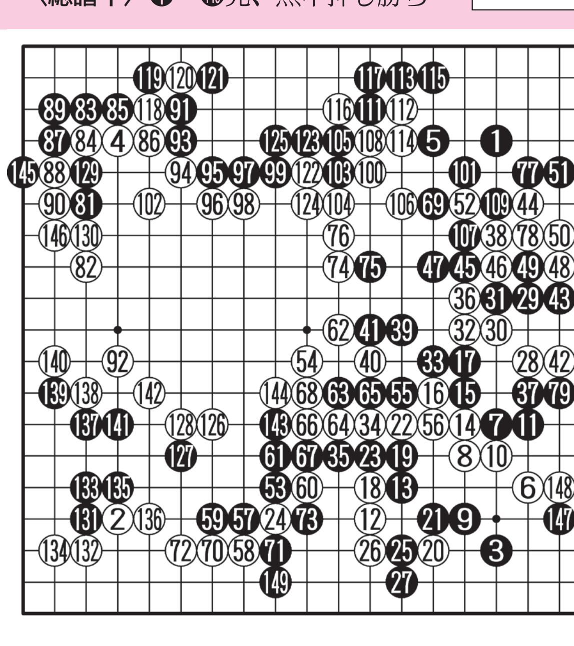
「緊張しました。万が一、私のせいで選手達が力を発揮できなかったら……という思いはありましたね」と胸の内を明かした謝七段。上野を世界一へ導いたことについて、「私にとっても嬉しいですし（共に過ごした中で）棋士として見習いたい部分がありました」と若き優勝者を讃えた。

上野自身も食事で気分が上がったようで大変助かったという。今後も世界戦のサポート体制は必要なのかもしれない。

〈第7回呉清源杯世界女子囲碁オープン戦決勝・第3局〉
黒　上野愛咲美（日本）
白　唐嘉雯（中国）
〈総譜3〉 1―193完、黒中押し勝ち
57(3) 60(16) 63 66 69 72 75 78 81 84 87 90各同 109(67) 124(80) 127(67)



〈第7回呉清源杯世界女子囲碁オープン戦決勝・第2局〉
黒　唐嘉雯（中国）
白　上野愛咲美（日本）
〈総譜2〉 1―215完、黒中押し勝ち
178(104) 181(105) 190(104)



〈第7回呉清源杯世界女子囲碁オープン戦決勝・第1局〉
黒　上野愛咲美（日本）
白　唐嘉雯（とうかぶん）（中国）
〈総譜1〉 1―149完、黒中押し勝ち